『源氏物語』と『白氏文集』—類似表現の検討—

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>丹羽 博之</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前大学論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>17-30</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2014年3月31日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00000492/">http://id.nii.ac.jp/1160/00000492/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Creative Commons : クリエイティブコモンズ - 表示 ⊕ 非営利 ⊕ 改変禁止

http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja
源氏物語
と
白氏文集
—類似表現の検討—

丹羽 博之

要旨
「源氏物語」の桐壘巻に、亡き桐壘更衣の母君を帝の使い命婦が訪れ、帝の言葉を伝え、共に亡き更衣を偲ぶ名場面がある。娘を亡くし、母君の歎きのことを「命長さの、いとうらう思ひたまへ知らるるに」について、『河海抄』には「新子」の「寿則多辱」と「寿則多辱」の「辱多し」とは、かなり意味がずれる。
一方、白楽天の『感旧』の詩は、二十年の間に親しい四人の友人が次々に亡くなり、自分だけが生きながらえた実感を結びの句で「人生、莫義苦長命、命長感旧多恵幸、人生深とし莫かれ、苦な長命なることを、命長ければ田に感し、悲辛多し」と直截に表現しており、読者の心を打つもののはあれが詠まれている。
白氏文集を愛読し、「源氏物語」の中の多くの利用した紫式部はこの詩も知っていて、桐壘巻に利用した可能性もある。「源氏物語」の中にある「新子」を利用した明確な例は「寿則多辱」を除けば認めにくい。従来の注の検討を行い、白詩との関係を考察する。

キーワード：紫式部，源氏物語，白居易，白楽天，白氏文集
紫式部が『源氏物語』を書くにあたって幾多の先行作品を利用したことには、特に多くの先学の研究がある。和漢比較文学の発展、深化に

まず問題の箇所を挙げる。

宮城野の落花をもはやす風の音に小杖がまつもを思いこすや

と呼ばれ、見えたままはつれて『名長さ』の『いとうらう思ひたまば知るるに』は、松の思はむことだに、呪づかし思うひたまばはべれば、

『南ら』『桜月抄』などが『荘子』を挙げる。その一方、『後述述らるる』に『文脈』『文意の微妙なずれを考察したため』『花鳥余情』『新月抄』

一方、新旧日本古典文学全集、日本古典集成、新日本古典文学大系は『荘子』を挙げる。
次に「荘子」（天地第二・第六）。堯、華封人問答「帝鄉寓言」の該当箇所の前後の文脈を検討する。

観乎華封人曰「噫！聖人謂聖人使聖人壽。」堯曰「使聖人壽。」封人曰「壽。」堯曰「使聖人壽。」封人曰「壽。」堯曰「使聖人壽。」封人曰「壽。」

必授之職多男子而授之職則何能之有。富而使人分之則何能之有。富而使人分之則何能之有。富而使人分之則何能之有。富而使人分之則何能之有。

千歳顚世去而復來，彼自雲至于帝鄉。三思莫至身常無常則何能之有。封人去之慟隨之曰「請問封人曰「退矣。」

この箇所、やや難解な箇所であるので、参考までに日本語訳を赤塚「荘子」（百氏文集）によって挙げる。

帝堯は、封人が「長生・富栄・多子の子は、人々たれもう欲しかがってているものです。とところが、あなただけが欲しからないのはな

帝堯は、すぐさんの男の子があれば、兄弟で争うことがなる憂いが多い。富栄зеれは、それを守るのに煩わしい事が多い。長生であろう、この世の辱に遭うことが多い。この云うことは、我が安靜な徳

『深氏物語』と『百氏文集』

（19）
大手前大学論集 第14号 (2013)

で、たくさんの男の子があって、それぞれに職業をお与えになるならば、それぞれが決めて、なんの変えることなどありませんように

について静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われいないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われていないときには、独りその徳

を修めて静かに述べる。天下に道が行われているときには、世人のさまざまな物ともに繁栄し、天下に道が行われいないときには、独りその徳

を修ま
次に、この曲をつけて『自氏文集』中の『感旧』の詩と『命長さの、いとうら思ひたまへ知らるるに』を検討する。

故李侍郎嘯直、長慶元年春薨。元相公徽之、大和六年秋薨。崔侍郎晦叔、大和七年夏薨。劉尚書夢得、会昌二年秋薨。四君子は予の執友なり。二十年の間に、凋零し共に尽く。唯予のみ衰病にして今をも独り存す。因って悲懷を詠じ、題して感旧。

故李侍郎嘯直は長慶元春に薨す。元相公徽之は大和六年秋に薨す。崔侍郎晦叔は大和七年夏に薨す。劉尚書夢得は会昌二年秋に薨す。四君子は予の執友なり。二十年の間に、凋零し共に尽く。唯予のみ衰病にして今をも独り存す。因って悲懷を詠じ、題して感旧。
四人先去我在後
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先づ去りて
四人先去我在後
四人先づ去りて
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り
四人先づ去り

一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身
一枝蒲柳衰残身

命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛
命長感旧多悲辛

「嘆」
会昌二「八四一」年、七十歳、洛陽での作。本文は那波道円本によった。以下、白詩は全て同書による。
作品番号、製作年、
場所は花房英樹氏「白氏文集的批判的研究」（朋友書店）によった。
というので、この二十年の間に親しい四人の友人が次々に亡くなり、自分だけが生きながらえ実感を結びの句で「人生観か苦命命
と亡くなった実感を素直に述べており、残者の心を打つ。昔の自詩には、このような恋気の無い率直な表現が多い。親しい人々を次々
と亡くすこと。白楽天は七十一歳、死の四年前の作である。

長生きをするということは誰も望まないことであるが、その反面、多くの親しい人の死に出会わなければならずという道理を白楽天は体験した。

「白氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「白氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。「百氏文集」には、「誥職子」の「多情多愛の多情」とはかなり意味が違れる。「誥職子」の場合は架空の事実の封人の寓話の
一つであり、誥職の料を知りし彼の物語の高名でもない。
次に《源氏物語》以前の作品の中、命長きはつらきの例を考察する。勘］三解・詩集、《田氏家集》等には例が見えないが、僅

在原氏亡息息外納言四十九日修讃文

敬白、敬讃請うる事

敬白、敬讃請うる事

在原氏亡息息外納言四十九日為に讃讃を修する文

後江相公

（26）
な多重に表わされる言葉があるが、その多くは命を借り、長命の望むものである。やや時代は下るが、『栄花物語』にも命
に関して述べた場面がある。後述定子の崩御の場面で Applies（伊周）は亡骸に対して
「日来物をいと心細しと思はしきたるに御けしきいかに」をと見奉りつれど、いとかくまでは思ひき、こさせざりつる。命長きは憂

和田英松・佐藤球共著『栄華物語続解』（明治書院・明治四〇年刊）には「命長きは云々は、世の諱に、しかへるなるべし。我子夫
篇に、多男子則多病、富則多事、寿則多辱、是三者非所以養德也」とあるなどよりやひけん」とある。『河海抄』等に影響を受けたもので
ありの隔たりがある。また「命長きはうきこと」は前掲の大江朝綱の『長寿為夢』により近い表現である。

新大河物語』には、この他に

（28）
上東門院のおほしき歓声をきって、いふ方なし。「命長くてかかる御事を見る事」と人の思ふらん事をさへ添へておぼし懸し給ふ。自詩の『感旧』の詩を挙げて以来、『源氏物語』の注解書に引かれることが多き、意味のどれを感じる。より文脈にみられる『白氏文集』の受容の密度と源氏物語の『荘子』受容度を考えた場合、「命長さの、といふらう思ひたまへらるるに」の背景には先
す白詩があったと考えるべきであろう。

* 本稿は、平成十一年度中古文学会秋季大会（二九九年十月十七日於奈良女子大学）での研究発表、
  “源氏物語”恪宗巻の“命長さの、いとうらう思ひたまへ知るるに”の背景
  — “白氏文集”巻六十九“盛田”詩との検討

(30)